

地球のしごと教養学部2019 講義詳細一覧

講座カリキュラム一覧

	テーマ	タイトル	講師	開催場所
体験会	大量消費社会	ファストファッションに代表される消費社会の課題 ～映画「トゥルー・コスト」から～		東京都内
オリエンテーション		農業体験 ～田植えを通じて自然の中に身を置く～	高浜大介	千葉県佐倉市
1 選択必修	思想・哲学①	農山漁村の民衆精神① ～仕事観・労働観～	内山節	東京都内
2 選択必修	思想・哲学②	農山漁村の民衆精神② ～「里」の思想と信仰心～	内山節	東京都内
3 選択必修	思想・哲学③	関係人口を哲学する～“あいだ”を生み出す都市と地方の共生とは～	高橋博之	東京都内
4 選択必修	流域経済圏	流域経済圏と水資源 ～命の源流のマネジメント～	橋本淳司	東京都内
5 選択必修	発酵と微生物	発酵という技法 ～微生物が教えてくれる共生の哲学～	渡邊格	鳥取県智頭町
6 選択必修	民俗伝承	山間地民俗文化とその伝承 ～世界農業遺産椎葉村の焼き畑農業から～	大和田順子ほか	宮崎県椎葉村
7 選択必修	多様性社会	多様性社会 ～障害者福祉で町おこし 弱さから始まる仕事と社会～	浦河べてるの家	北海道浦河町
8 選択必修	共同体①	地域の務め① ～宮崎県諸塚村、自治公民館制から～	矢房孝広	宮崎県諸塚村
9 選択必修	共同体②	地域の務め② ～祭りの精神、郡上おどりから～	-	岐阜県郡上市
10 選択	農業①	自然栽培と固定種・在来種 ～命を繋ぐ根源的活動とは～	岡本よりたか	岐阜県郡上市
11 選択	林業	自伐型林業 ～環境保全と経済性の両立～	中嶋健造	高知県佐川町
12 選択	木材加工	製材と木材加工 ～レーザー・カッターによる高付加価値化～	藤川豊文	高知県本山町
13 選択	漁業	大数網漁 ～近海の魚を地域で頂く～	-	徳島県海陽町
14 選択	狩猟	狩猟とジビエ ～人と獣の共生関係～	興膳健太	岐阜県郡上市
15 選択	畜産	幸せな牛からおいしい牛乳 ～24時間365日放牧～	中洞正	岩手県岩泉町
16 選択	衣服	天然繊維の再興 ～オーガニックコットン事業を通して～	渡邊智恵子	東京都内
17 選択	住居	住まいの再考 ～風土に根差した伝統的日本家屋の良さとは～	山田貴宏	神奈川県相模原市
18 選択	ツーリズム	里山インバウンドツーリズム ～暮らしを旅するコンテンツ～	山田慈芳	岐阜県飛騨市
19 選択	金融	お金の地産地消 ～地域電子通貨と循環型経済～	古里圭史	岐阜県飛騨市
20 選択	エネルギー	再生可能な自然エネルギー ～エネルギーの地産地消～	井筒耕平	岡山県西粟倉村
21 選択	教育	オルタナティブ教育 ～森の中で、子どもの力を信じ、見守る保育～	西村早栄子	鳥取県智頭町
22 選択	ものづくり	伝統工芸 ～時代の変化へ対応した伝統技術～	-	新潟県三条市・燕市
23 選択	商業	地域商社 ～地域密着型のものづくり&プロデュース～	畦地履正	高知県四万十市
24 選択	家庭養生	薬草と薬膳 ～草木のちからで養生～	新田理恵	静岡県富士宮市
25 選択	医療①	統合医療 ～現代西洋医学と伝統東洋医学の統合～	山本竜隆	静岡県富士宮市
26 選択	医療②	コミュニティナース ～住民の一番近くに居る医療人材～	未定	島根県雲南市
27 選択	アート/デザイン	アートが人を呼び、人が人を呼ぶ ～西会津国際芸術村の取り組み～	矢部佳宏	福島県西会津町
28 選択	サテライトオフィス	地域に溶け込むサテライトオフィス ～都会からの人材と地域を繋ぐ～	吉田基晴	徳島県美波町
29 選択	ゴミ・リサイクル	ゼロウェイスト ～資源循環の輪を繋ぐ～	未定	徳島県上勝町
30 選択	働き方	ファミリーマネジメント ～共働き、オンオフが交差するパラレルワーク～	平野彰秀・養生里	岐阜県郡上市
31 選択	子育て	コミュニティベースド育児 ～映画「いのちのはじまり」から～	-	北海道浦河町
32 選択	地方自治体戦略①	田園回帰1%戦略 ～田園回帰戦略と所得取戻し戦略～	藤山浩	島根県益田市
33 選択	地方自治体戦略②	島根県雲南市の事例 ～小規模多機能自治や起業支援NPO、その他～	大谷吾郎	島根県雲南市
34 選択	地方自治体戦略③	地方創生戦略のリアル ～岩手県田野畑村のケーススタディ～	未定	岩手県田野畑村
		【卒業式】		

★選択必修講座群とは・・・地球のしごと大学が大切にしている価値観や実際に地域へ移住した際に地域の方々との協働に役立つ考え方を学ぶ講座群です。この講座を受けることで、選択講義群の意義が深いものとなり、カリキュラム全体の循環が見えてきます。

★選択講義群とは・・・個別の業について学ぶ講義群です。ご自身の関心や専門に合わせて選ぶことができます。

①どのプランも、選択必修講座群から3つ以上受講頂きます。当学部の土台をなす講座です。

②地方開催の講義は、遠征講座として、連続で参加が可能です。

【遠征一覧】

遠征名	日程	含まれる講座
静岡遠征	5月11日（土）～12日（日）	医療①、家庭養生
島根遠征	5月25日（土）～27日（日）	地方自治体戦略①、地方自治体戦略②、コミュニティナース
岩手遠征	6月8日（土）～9日（日）	畜産、地方自治体戦略③
岐阜遠征①	7月13日（土）～16日（火）	共同体②、働き方、ツーリズム、金融
宮崎遠征	8月2日（金）～5日（月）	民俗伝承、共同体①
鳥取・岡山遠征	9月7日（土）～9日（月）	エネルギー、発酵と微生物、教育
新潟・福島遠征	10月3日（木）～6日（日）	ものづくり、アート/デザイン
岐阜遠征②	11月2日（土）～4日（月・祝）	農業①、狩猟
北海道遠征	11月（日）～18日（月）	子育て、多様性社会
徳島遠征	12月14日（土）～16日（月）	サテライトオフィス、ゴミ・リサイクル、漁業
高知遠征	1月11日（土）～13日（月）	林業、木材加工、商業

(大量消費社会) ファストファッションに代表される消費社会の課題 ～映画「ザ・トゥルー・コスト」から～

体験会



日時：4月14日（日）

場所：ちよだプラットフォームスクエア

講義内容：

本講義から始まる年間講義は、現代社会の課題を解決する仕事と自分のやりたい仕事の重なりあう部分を見つける旅のようなものです。それに先立って本講義では、そもそも現代社会の課題と読んでいるものは何か？という点について、ドキュメンタリー映画「ザ・トゥルー・コスト」を鑑賞し、共通認識を持ちます。また、一人ひとりが感じる課題意識を、掘り下げて考える作業をします。

「ザ・トゥルー・コスト」とは・・・

華やかなファッション業界の裏側の知られざるストーリーに光を当て、「服に対して本当のコストを支払っているのは誰か？」という問題を提起する、ドキュメンタリー映画です。

農業体験 ～田植えを通じて自然の中に身を置く～

オリエンテーション



日時：4月27日（土）

場所：千葉県佐倉市

講義内容：

千葉県佐倉市にある当大学の系列農園である「地球のしごと農園」では、無農薬・無化学肥料でのお米作りを通して、ホタルが舞い飛ぶような環境づくりをしています。企業の農業体験の場であったり、市民農園としてのmy 田んぼ、my 大豆畑などを運営しています。

本講座では、教養学部のスタートに当たり、田植えという日本の伝統的協同作業を通してチームビルディングを行います。一年の中で一番過ごしやすく、気持ちの良い季節に、東京から近い里山で、リフレッシュしましょう。

お昼は美味しいご飯をつくり、皆でいただきます。

講師：高浜大介

株式会社アースカラー 代表取締役社長
NPO法人地球のしごと大学 理事長

1979年生まれ。東京墨田区出身。岩手県田野畑村在住。立教大学観光学部卒。

大手国際物流企業、人事・教育ベンチャー企業勤務後、2010年に、地球・大地に根ざした職業人「アースカラー」の育成・輩出を手掛ける株式会社アースカラーを設立。また、千葉県佐倉市にて約1ヘクタールの田畑にて無農薬・無化学肥料のお米作りや大豆作り、農業体験などを主とする教育農場「地球のしごと農園」を2016年に立ち上げ。2018年11月より岩手県田野畑村へ家族で移住。地域創生政策企画職を兼務。持続可能な地域創りが後半人生の目標。



【1】(流域経済圏) 流域経済圏と水資源 ～命の源流のマネジメント～

選択必修

日時：4月28日(日)
場所：都内



講義内容：

人間の暮らし全てに共通して不可欠な要素、それは「水」です。日本は奇跡的に水資源が豊富と言われており、水のリスクを日常的に感じる機会はありません。しかし世界を見渡せば、中国やオーストラリアなど水資源が死活問題になっている国も少なくありません。水に困らない国は珍しいのです。しかしながら「外国人が過疎地の山を買いたっている」「地下水量に変化がみられる」など、日本人の水資源も安泰では決してありません。

本講座では人間に必要な水資源の循環にフォーカスし、流域経済圏(※)や、地球規模で枯渇を始めている地下水に関する知識や資源管理のリスクについて学びます。生命の源となる水循環を起点に、流域単位で経済と環境保全の両立を図る水資源の扱い方を考え、議論します。

(※)流域経済圏とは、分水嶺から沿岸までの河川の流域圏における経済的なつながりの単位を表す。場合によっては複数の行政区画にまたがる。本来、一つの流域圏は、上流の山村から下流の漁村まで相互に関連しあい、社会、経済的に強いきずなを保有する。古来より人類は大きな河川を中心に集落を形成してきたことから流域経済圏の考え方はとても重要である。環境循環型社会は流域経済圏内での循環からスタートすべきである。

講師：橋本淳司



水ジャーナリスト

アクアスフィア・水教育研究所 代表

水と人の未来を語るWEBマガジン「アクアスフィア」 編集長

NPO法人 WaterAid Japan 理事

NPO法人地域水道支援センター 理事

武蔵野大学非常勤講師

愛知県立芸術大学非常勤講師

1967年、群馬県生まれ。学習院大学卒業。水ジャーナリストとして水問題やその解決方法を調査、発信。アクアスフィア・水教育研究所を設立し、自治体・学校・企業・NPO・NGOと連携しながら、「みずから考える人」、「水を語れる人」を育成するなど、水問題を水リテラシーの普及活動(国や自治体への政策提言やサポート、子どもや市民を対象とする講演活動、啓発活動のプロデュース)を行う。

近著に『67億人の水』(日本経済新聞出版社)、『日本の地下水が危ない』(幻冬舎新書)、『100年後の水を守る 水ジャーナリストの20年』(文研出版)、『水がなくなる日』(産業編集センター)など。

【2】(医療①) 統合医療 ～現代西洋医学と伝統東洋医学の統合～

選択

日時：5月11日(土)
場所：静岡県富士宮市



講義内容：

代替医療とは、現代西洋医療の領域外の医学・医療体系を総称したものです。東洋医学(漢方、鍼灸など)全般のほか、食養生、プロバイオティクス、呼吸法、太極拳、波動医学、その他アーユルヴェーダやユナニ医学などの伝統医学からニューサイエンスと呼ばれている医療としてはまだ認知されていない現代科学的最先端医学まで、幅広い医療分野を指します。そして、代替医療のみならず、現代西洋医学も含めて実践する医療が統合医療。症状だけではなく、その人の性格や暮らしなども含めて診断することから、全人的な医療、ホリスティック医学と呼ばれることもあります。統合医療の基本は、ひとりひとりの患者に対し、様々な方面から診ることで多面的に捉え、最適な医療をコーディネートすることにあります。また、医療へのアクセスも重要です。住んでいる地域に、最良の医療があることが、理想的かつ自然な医療のかたちです。

講師は、朝霧高原診療所の院長先生である山本竜隆さん。過疎化・高齢化により僻地に医療が届かなくなっている中で、地域医療とインバウンドと絡めた養生医療の両輪で、医療の問題に取り組んでいます。そのご活動を踏まえて、経験的事実として利用される代替医療・自然療法と近代西洋医学とを合わせた統合医療の可能性、地域医療の在り方について議論します。

講師：山本竜隆



朝霧高原診療所 院長

WELLNESS UNION(富士山静養園・日月倶楽部) 代表

昭和大学医学部非常勤講師・聖マリアンナ医科大学非常勤講師

1966年神奈川県生まれ。聖マリアンナ医科大学、昭和大学医学部大学院卒業。

内科研修、医学研究の後、アンドルー・ワイルが主催する米国アリゾナ大学医学部統合医療プログラムAssociate Fellow(2000年～2002年)をアジアで初めて修了。その後、統合医療ビレッジグループ総院長(東京・四谷)、JA中伊豆温泉病院内科医長、(株)小糸製作所静岡工場診療所所長・産業医などを経て現職。自ら湧き水や新での生活をしつつ、地域医療とヘルスツーリズムの両輪で、地域モデル構築を目指している。また「自然欠乏症候群」を通して、現代人の自然体験と健康維持の重要性を指導している。

富士箱根伊豆国立公園内であり富士山麓の20000坪を有する滞在施設「日月倶楽部」では、関連施設の「富士山静養園」と共にヨガや瞑想などのマインドフルネスや、企業の健康管理者への指導など、雄大な自然環境に身を置いて行う各種滞在プログラムを提供している。

【3】（家庭養生）薬草と薬膳 ～草木のちからで養生～

選択



日時：5月12日（日）

場所：静岡県富士宮市

講義内容：

統合医療の中で選択肢となる、食養生や薬膳、漢方。私たち人間は、植物を、食べ物としてのみならず、薬としても利用してきました。里山から海辺まで、あらゆるところに生息する薬草の力を借りて、自分たちの体調を整えることが出来ます。

また、今は医療はお医者さんによってなされ、薬は薬剤師さんが扱います。しかし、自分の身体のことには自分が責任を持ち、有る程度自分で手当てできるようになりたいものです（セルフメディケーション）。かつては家庭に野草の力を集めたお薬があり、お母さんやお祖母さんが手当てしていたそうです。

本講義では、食卓研究家で、TABEL株式会社代表取締役の新田理恵さんから、薬草の力の頂き方や考え方を学び、豊かな食生活や生きる力としての養生の在り方を考え議論します。

講師：新田理恵



食卓研究家

伝統茶ブランド {tabel} 代表取締役社長

管理栄養士であり国際薬膳調理師。食生活のアップデートを目標に、料理とその周りにおける関係や文化も一緒に提案し、地域の商品開発やレクチャーを行っている。日本の在来ハーブ・薬草と出会い、リサーチをはじめて伝統茶ブランド {tabel} を2014年に立ち上げる。2016年8月にTABEL株式会社へと法人化し、薬草のある健やかな暮らしを提案している。2018年初春、薬草大学NORMを開校。

【4】（地方自治体戦略①）田園回帰1%戦略 ～田園回帰戦略と所得取戻し戦略～

選択



日時：5月25日（土）

場所：島根県益田市

講義内容：

増田レポートが届けた地方消滅論が衝撃を与えるなか、「過疎」発祥の地・島根県の正反対のデータが目立っています。県の大半を占める中山間地域の3割以上の、とくに離島や山間部といった「田舎の田舎」で、若い世代のUターン、Iターンが目立ちます。このような「田園回帰」を全国へと広げていく「ビジョン」と「戦略」を、循環型社会への進化を展望し、大胆に提案しているのが藤山浩さんの「田園回帰1%戦略」です。

本講座では「田園回帰1%戦略」や「所得1%取り戻し戦略」について理解し、過疎農山漁村の再生を考え、議論します。

講師：藤山浩



一般社団法人 持続可能な地域社会総合研究所 所長

1959年島根県生まれ。一橋大学経済学部卒業後、高等学校社会科教諭、中国・地域づくりセンター主任研究員などを経て1998年島根県中山間地域研究センター、2004年より現職。専門は、中山間地域政策、地域計画、環境管理、GISなど。2008年広島大学大学院より博士号（マネジメント）取得。

国土交通省・国土情報整備中期的方針検討委員会委員、同・あらたな結（ゆい）研究会委員、同・過疎集落研究会委員。

著書に『中山間地域の「自立」と農商工連携 ～ 島根県中山間地域の現状と課題』第1章「中山間地域問題の基本構造」、『島根の未来を考える－島根地域政策の課題と展望』第17章「中山間地域から先駆ける持続可能な地域社会への転換」など。

【5】（地方自治体戦略②）島根県雲南市の事例 ～小規模多機能自治や起業支援NPO、その他～

選択



日時：5月26-27日（日・月）

場所：島根県雲南市

講義内容：

① 小規模多機能自治

小規模多機能自治とは、小学校区のような小規模のエリアを対象に、分野横断的な多種の機能を持った、住民による主体的な自治の仕組みです。これに取り組む全国140以上の団体、210以上の自治体の中でも先進的な雲南市の状況を視察します。

① たたら製鉄復活関連施設見学

全国で唯一現存する高殿式のたたら施設を持つ田部家が、たたら製鉄を復活させ、創業体験などを通して地域の観光産業も盛り上げていく予定です。

② 入間花田植イベント参加・地元の方々と交流

毎年5月の最終日曜日、伝統衣装に身を包んだ早乙女が田植えを行う行事です。一時担い手不足で途絶えていたものの、有志により復活されてからは、入間を代表する行事として地域総出で守られています。

③ コウノトリと共生するまちづくり見学

生物多様性は、地域活性の一つのテーマです。雲南市では、1. コウノトリが継続的に営巣できる豊かな環境づくり、2. コウノトリがもたらす恵みの好循環、3. 継続的な活動を支える仕組みづくりを基本理念とし、“幸せを運ぶコウノトリ”と共生するまちづくりを行っています。

【6】コミュニティナース ～住民の一番近くに居る医療人材～

選択



日時：5月26-27日（日・月）

場所：島根県雲南市

講義内容：

医療格差、高齢化などの解決策として注目されるのが、コミュニティナースです。コミュニティナースは、いつも地域の中にいて「健康的なまちづくり、をする医療人材です。病院や福祉施設、訪問看護に従事する看護師と異なり、地域の中で住民とパートナーシップを形成しながら、その専門性や知識を活かして活動する医療人材のことです。地域で中長期的に住民と関わることで、健康的なまちづくりに貢献することを目指します。本講義では、コミュニティナースの取り組みを学び、地域での健康のあり方や作り方について考え、議論します。

【7】幸せな牛からおいしい牛乳 ～24時間365日放牧～

選択



日時：6月8日（土）

場所：岩手県岩泉町

講義内容：

小さな牛舎に繋がれ、糞尿にまみれて生活する牛たち。安くて濃い牛乳を美味しいとして売り込む乳業界。本来の牛乳の美味しさとは、私たちが飲みたい牛乳とは、どんなものでしょうか。今回参考にするのは、東北は岩手県岩泉町にある中洞牧場。ここにいるのは、広い放牧地に解放され、自由に草を食べ、狂牛病とは無縁の、健やかな牛たち。牛がみな、穏やかで優しい表情をしています。本物の味が高い評価を受けるピン入りの低温殺菌牛乳が大人気を博しています。理念だけでなく、美味しい牛乳として市場からも評価を受け、事業としてもしっかりと成立させている牧場です。

講義では、牧場長の中洞正さんと一緒に、理想の牛と人間の関係性を探ります。

講師：中洞 正

**農業生産法人株式会社企業農業研究所 中洞牧場 牧場長**

東京農業大学農学部卒業後、岩手県岩泉町で酪農を開始。24時間365日畜舎に牛を戻さない通年昼夜放牧酪農、牛乳プラントの設計、建築、乳製品の製造販売まで手掛ける中洞式山地酪農を確立した。東京農業大学客員教授。

【8】（地方自治体戦略③）地方創生戦略のリアル ～岩手県田野畑村のケーススタディ～

選択



日時：6月9日（日）

場所：岩手県田野畑村

講義内容：

現在、政府から地方創生関連予算として地方自治体へ潤沢な資金が投下され続けています。私たちの支払う税金は効果的に目的のために活用されねばなりません。

「地方創生」を成功させたいならば、民間と地方自治体との協働・協力関係（公民連携）は必須です。そのために、地方自治体とその職員の思考様式、意思決定・行動メカニズムを理解し、協働をスムーズにする必要があります。

本講座では、教育立村を掲げる岩手県田野畑村を訪問し、同村のリアルな地方創生総合戦略と予算企画と執行の仕組み・政策を考える上でのポイントについて学びます。

講師：高浜大介

**株式会社アースカラー 代表取締役社長
NPO法人地球のしごと大学 理事長**

1979年生まれ。東京墨田区出身。岩手県田野畑村在住。立教大学観光学部卒。

大手国際物流企業、人事・教育ベンチャー企業勤務後、2010年に、地球・大地に根ざした職業人「アースカラー」の育成・輩出を手掛ける株式会社アースカラーを設立。また、千葉県佐倉市にて約1ヘクタールの田畑にて無農薬・無化学肥料のお米作りや大豆作り、農業体験などを主とする教育農場「地球のしごと農園」を2016年に立ち上げ。2018年11月より岩手県田野畑村へ家族で移住。地域創生政策企画職を兼務。持続可能な地域創りが後半人生の目標。

【9】(衣服) 天然繊維の再興 ～オーガニックコットン事業を通して～

選択

日時：6月23日(日)
場所：都内



講義内容：

世界中の農薬の20パーセントが綿花栽培に使われています。綿花栽培は大量の水を使うので、世界最大の綿花の産地、アラビア海が干上がり、塩害が生じ、その地域に住む人々は甚大な健康被害にあっています。また、バングラデシュでファストファッションメーカーの工場が入ったビルが倒壊、1100人以上が亡くなるという大惨事もありました。化学繊維もどんどん増えており、化学物質による肌への負担、環境ホルモン・化学繊維・静電気が発生しやすいといったことから様々なアレルギーや病気につながる事が懸念されます。過剰な広告、ファッション業界の「計画的陳腐化」計画に乗せられ、流行に流され、日本人は一年間で10キロの洋服を買い、8.5キロを捨てています(2009年)。

本講義で参考にするのは、オーガニックコットンのパイオニア、アバンティ。厳しい検査基準を満たしたオーガニックコットン、日本の職人の手による顔の見えるものづくりは、現代の資本主義の論理のアンチテーゼです。

代表であり、様々な活動をされている渡邊智恵子さんに、市場経済の中では難しいオーガニックコットンの事業化、業界動向について伺い、衣服の未来について、一緒に考えます。

講師：渡邊 智恵子

株式会社アバンティ代表取締役社長

日本でのオーガニックコットンの製品製造のパイオニア。

2010年NHK「プロフェッショナル～仕事の流儀」に社会起業家として取り上げられる。その後、

2011年一般社団法人小諸エコビレッジ設立、代表理事就任。2014年一般社団法人わくわくのびのびえこども塾設立、代表理事就任。

2016年一般財団法人森から海へ設立、代表理事就任。2017年一般財団法人22世紀に残すもの 発起人として活動を始める等各分野でも活動している。



【10】(思想・哲学①) 農山漁村の民衆精神① ～仕事観・労働観～

選択必修



日時：6月23日(日)

場所：都内

講義内容：

人生の長い時間を費やす仕事や労働。仕事や労働の在りようは、その人間の幸福度に密接に関わります。経済第一優先の労働観を越えるためのヒントは、内山氏の語る「温かい貨幣と冷たい貨幣」「劣化する貨幣」などにあるかもしれません。日本の農山漁村での仕事や労働に対する考え方、価値観を紐解きつつ、貨幣とは何なのか？日本の民衆が持っていた仕事観・労働観、そして対価としての金銭との関係性とはどのようなものか？「おすそ分け」の贈与経済から、近年注目されているソーシャルビジネスまで、私たちが未来に求めるべき仕事の在りようについて考えます。

講師：内山節

哲学者

立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授(2015年定年にて退任)

特定非営利活動法人森づくりフォーラム代表理事

1950年、東京生まれ。1970年代から東京と群馬県上野村の二地域を往復する生活を営み、自ら畑を耕し、里山に囲まれた農村の暮らしを通して、自然と労働の思想を問い続ける実践的な哲学者として知られている。

自然論・労働論・共同体論などを専門とし、立教大学大学院教授、東京大学講師などを歴任。東北農家の会、九州農家の会などでも講師を務める。主な著書に「ローカリズム原論」「文明の災禍」「共同体基礎理論」「清浄なる精神」「里という思想」「自然と労働」「日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか」などがある。



【11】（共同体②）地域の務め② ～祭りの精神、郡上おどりから～

選択必修



日時：7月13日（土）

場所：岐阜県郡上市

講義内容：

日本人にとって祭りとは何でしょうか。春夏秋冬の季節に応じて私たちの祭りはあります。春の訪れとともに豊作を祈願し、夏には台風や害虫、疫病などの被害にあわないことを願い、秋の実りに感謝を捧げ、寒さの厳しい冬には穢れを落とすなど魂を充実させるのが、祭りです。農山漁村では自然に寄り添う人々の営みがあり、日本人の季節感や自然に対する意識は祭りに凝縮されているといつて過言ではありません。本講座では岐阜県郡上市を訪れ、郡上踊りに参加し、水の城下町、風光明媚な郡上八幡を散策見学したりと、祭りと観光について考えます。

【12】（働き方）ファミリーマネジメント ～共働き、オンオフが交差するパラレルワーク～

選択



日時：7月14日（日）

場所：岐阜県郡上市

講義内容：

都会と中心に、リモートワークやフリーアドレスオフィス、パラレルワークなどの新しい働き方が注目を集めています。個人はライフ・ワーク・バランスを実現でき、企業は柔軟な働き方ができることによって優秀な人材を集められるので、双方にとって良い形と言えます。一方地方でも、地方だからこそできる豊かな働き方・暮らし方をしている例があります。

講師の平野彰秀さんと馨生里さんは、岐阜県郡上市、石徹白という奥まった地域で、共働きで3男児を育てています。彰秀さんは、小水力発電所や移住プロジェクトの規企画運営、馨生里さんは自然素材の洋品店を営んでいます。

本講義では、彰秀さんと馨生里さんの生活スタイルを伺い、地方で暮らすときに実現できる暮らし方のイメージをつかみます。また、より働き暮らしやすい地方での生活を作るために必要なシステムや支援策を考えます。

講師：平野彰秀



NPO法人地域再生機構 副理事長
石徹白農業用水農業協同組合 参事
郡上カンパニーディレクター
HUB GUJO 理事

1975年、岐阜市生まれ。東京大学工学部都市工学科卒、同大学院環境学修士。外資系経営コンサルティング会社等を経て、32歳で岐阜市にUターン。2011年9月、人口270人の集落、岐阜県郡上市白鳥町石徹白（いとしろ）に移住。集落ほぼ全世帯の出資による小水力発電事業を立ち上げた。その模様は、映画「おだやかな革命」にも取り上げられた。

講師：平野馨生里

**石徹白洋品店 店主**

1981年岐阜市生まれ・育ち。慶応義塾大学総合政策学部卒。学生時代にカンボジアで伝統織物を復刻するNPO（IKTT）にてフィールドワーク。地域に根差した伝統文化の重要性を学ぶ。現在、石徹白で、地域に残る野良着などを復刻した商品開発を展開。一方で、地元のお年寄りにお話を聞き「聞き書き集」を発行するなどの活動も行っている。

【13】(ツーリズム) 里山インバウンドツーリズム ～暮らしを旅するコンテンツ～

選択



講師：山田慈芳

**株式会社美ら地球 取締役**

東京都出身。慶応義塾大学 政策・メディア研究科修了。1999年 プライスウォーターハウスコンサルティング（現IBMビジネスコンサルティングサービス）に入社。ナレッジマネジメント部にて、情報収集・共有・活用スキルを身につけた後、戦略事業部にて、事業・組織戦略プロジェクトに関わる。2004年2月同社を退社後、6月から2006年1月まで美ら地球回遊の旅に出る。2007年10月 株式会社 美ら地球設立。総合旅行業務取扱管理者／通訳案内士

日時：7月15-16日（祝・火）

場所：岐阜県飛騨市

講師：山田慈芳

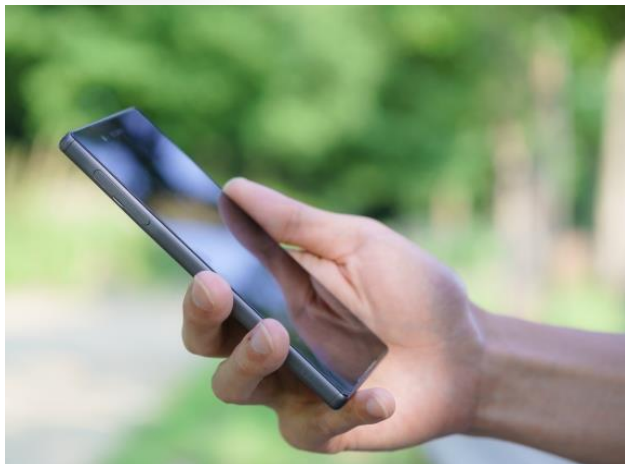
講義内容：

岐阜県飛騨市高山で今、世界中から注目を集めるツーリズム事業があります。その名は、「SATOYAMA EXPERIENCE」。従来の莫大な投資をかけた開発型の観光ではなく、その土地の在りのままの暮らしや文化、自然環境を、地域に負荷をかけずに外国人に見聞・体験してもらう里山サイクリングツーリズムは、外国人から熱狂的な支持を得ています。

SATOYAMA EXPERIENCEを運営している株式会社美ら地球（ちゅらぼし）さんの話からツーリズムの現状と課題を把握し、ツーリズム（観光）の未来について考え、議論します。

【14】お金の地産地消 ～地域電子通貨と循環型経済～

選択



講師：古里圭史

**公認会計士・税理士**

飛騨信用組合 常勤理事／総務部長／フィンテックプロジェクトチームリーダー

ひだしんイノベーションパートナーズ株式会社 代表取締役社長

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特任准教授

1979年生まれ。早稲田大学卒業。2005年株式会社スクウェア・エニックス入社。2007年有限責任監査法人トーマツ トータルサービス1部入所。上場企業・非上場企業の会計監査業務、ベンチャー企業に対するIPO支援業務、内部統制構築支援業務等に従事。2012年10月に地元、飛騨・高山にUターンし、地域密着のコミュニティバンクである飛騨信用組合に入組。融資部企業支援課長、経営企画部長を経て現職に至る。ForbesJapanローカルイノベーターズオブザイヤー2018にてグランプリを獲得。

日時：7月16日（火）

場所：岐阜県飛騨市

講義内容：

地域内の消費活動と経済循環を促進し、地元に還元する仕組みとして、地域通貨が注目されています。地域通貨導入によって、現状の地域課題である域外への資金流出、個店の活力の低下、消費低迷に対して、地域内の消費活動と経済循環を促進するという地域経済の活発化と、コミュニティ意識の希薄化、地域活動の担い手不足、社会的孤立に対して、地域住民のつながりや助け合いを促進するなどのコミュニティの活発化が図れます。

本講義では、地域通貨分野における先端事例である「さるぼぼコイン」の取組み状況を実際に現地にて活用状況を見て学び、金融面における地域課題に対する解決策としての地域通貨の可能性を議論します。

【15】(民俗伝承) 山間地民俗文化とその伝承 ～世界農業遺産椎葉村の焼き畑農業から～

選択必修

日時：8月3日(土)
場所：宮崎県椎葉村



講義内容：

「高千穂郷・椎葉山地域」は、2015年12月15日、その世界農業遺産(※)に国内6地域目として認定されました。険しく平地が少ない山間地において、針葉樹と広葉樹で構成されるモザイク林等による森林保全管理、伝統的な焼畑農業、急斜面に築かれた500km超の水路網を有する棚田の米作りなどの複合的農林業システムと神楽など特色ある伝統文化があることが、認定の理由です。

今回の講義では、その高千穂郷・椎葉山地域に行き、LOHASを日本に広めたことで有名な大和田順子さんにこの世界農業遺産、そして高千穂郷・椎葉山地域についてお話を聞きます。また、日本で唯一伝統的な焼畑農業を続けてきた椎葉村の椎葉家の山村にて、年に一度の火入れを見せて頂きます。伝統的な暮らしを守り繋いできた方々を訪ね、そこに住む人々とその地域に残る伝統農法や知恵、地域システム＝「民族」を学びます。また、翌日はそば打ち体験を行い、椎葉の食を楽しみます。

(※)世界農業遺産とは、伝統的な農業と、農業によって育まれ維持されてきた土地利用(農地やため池・水利施設などの灌漑)、技術、文化風習、風景、そしてそれを取り巻く生物多様性の保全を目的に、世界的に重要な地域を国連食糧農業機関(FAO)が認定するものです。2002年に国連食糧農業機関により開始されました。

講師：大和田順子ほか



一般社団法人ロハス・ビジネス・アライアンス共同代表
地域力創造アドバイザー(総務部)

百貨店、シンクタンク、英国化粧品ブランド、環境コンサルティング会社等で20数年マーケティングの実務を経て2006年独立。2002年、日本にLOHAS(ロハス)を紹介。

全国各地で世界農業遺産、有機農業や生物多様性、再生可能エネルギーを活かした関係人口の創出や“持続可能な地域づくり”プロジェクトに参画。

世界農業遺産等専門家会議委員(農林水産省)／長野県環境審議会委員／宮崎県観光審議会委員／立教大学21世紀社会デザイン研究科「サステナブル・コミュニティ論」、静岡文化芸術大学文化政策学科「食文化論」兼任講師／環境カウンセラー／消費生活アドバイザー／著書『アグリ・コミュニティビジネス』(2011年、学芸出版社)、『SDGsとまちづくり』(2019年3月、共著、学文社)他

【16】(共同体①) 地域の務め① ～宮崎県諸塚村、自治公民館制から～

選択必修



日時：8月5(月・祝)

場所：宮崎県諸塚村

講師：矢房孝広

講義内容：

本来自治は、自らを治めるという文字の通り、自分たちの地域をみんなで豊かに生きていく場所とするために行う行為です。

諸塚村は、戦前から地域での社会教育が盛んであり、終戦後GHQによる地場組織解体命令に屈せずに、戦前の集落ごとの民主団体を「自治公民館」として置き換える提案をGHQに行い、自治公民館制度の許可を勝ち取りました。今では16の公民館で壮年部・婦人部などが組織され集落を束ねています。その連絡協議会会長は自治組織の長であり、村長と対等な立場にあります。

本講座では、地域住民による自治とは何か？行政による統治とは何が異なるのか？実際に集落の共同作業にも参加して、諸塚村の誇りある取り組みから学びます。

【17】（哲学）関係人口を哲学する ～“あいだ”を生み出す都市と地方の共生とは～

選択必修



日時：8月31日(土)

場所：東京都内

講師：高橋博之

講義内容：一日中頭ばかり使い、身体性が喪失していく社会を解剖学者の養老孟司さんは脳化社会と命名した。脳化が進む都市で、生きる意義や生きるリアリティに飢える都市住民は増加の一途にある。一方で、農業など地方で一次産業に携わる人たちは食べるものなど生きるために最低限必要なものを自分でつくる。そこにはわかりやすい「生きる」がある。そして《あいだ》の喪失。自然を排した都市で暮らす私たちと自然の《あいだ》はない。関わりがなければ関心を持ってない。だから、環境汚染や地球温暖化は止まらない。97%の消費者と3%の生産者の分断は、そのまま都市と地方の分断につながっている。東京一極集中の裏側で進む地方の農山漁村の衰退。人間が生きるために必要な食べ物や空気、水を生み出す自然に手をかける人間が減っているというのに、都市住民はまるで他人事のように無関心を決め込んでいる。私たちは暮らしや社会に《あいだ》を取り戻す必要があるのではないだろうか。昨今ホットワードとなっている「関係人口」について哲学しよう。

講師：高橋博之



株式会社ポケットマルシェ

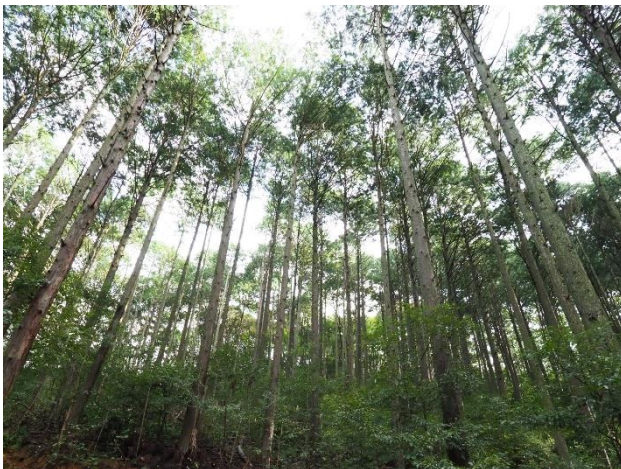
代表取締役一般社団法人日本食べる通信リーグ代表理事

特定非営利活動法東北開墾代表理事

1974年、岩手県花巻市生まれ。2006年、岩手県議会議員補欠選挙に無所属で立候補、初当選。2期6年をつとめる。2011年の震災後、事業家へ転身。“世なおしは、食なおし。”のコンセプトのもと、2013年に特定非営利活動法人「東北開墾」を立ち上げ、史上初の食べ物つき情報誌『東北食べる通信』を創刊。その後一般社団法人「日本食べるリーグ」を創設し食べる通信を全国へ展開。すでに30以上の「食べる通信」が各地に誕生している。2016年には生産者と消費者を直接結びつけるサービス「ポケットマルシェ」をリリース。生産者と消費者が結びついた強い一次産業を目指している。2019年TV番組「カンブリア宮殿」に出演、大反響を得た。

【18】（エネルギー）再生可能な自然エネルギー ～エネルギーの地産地消～

選択



日時：9月7日(土)

場所：岡山県西栗倉村

ジャンル：エネルギー

講義内容：

太陽光、風力、地熱、小水力、バイオマス、太陽熱など、国レベルの自然エネルギー政策の具体的な課題から、地域での事業化や普及に向けた取り組み、各種のトレンド・データ、国内外の自然エネルギー事例や、各地で続々と立ち上がるご当地エネルギーの動向、地域と調和した自然エネルギーの導入にむけた社会的合意形成の取り組みについて書籍などを通じて学びつつ、バイオマスエネルギーを活用した岡山県西栗倉村の「あわくら温泉 元湯」を訪問・宿泊し、「元湯」の事例をもとにケーススタディを行います。

講師：井筒 耕平



(株)sonraku 代表取締役社長

1975年生。愛知県出身、神戸市在住。環境エネルギー政策研究所、備前グリーンエネルギー(株)、美作市地域おこし協力隊を経て、2012年(株)sonraku(旧村楽エナジー)代表取締役就任。博士(環境学)。おふろとエネルギーコンサルタント。

岡山県西栗倉村で「あわくら温泉元湯」とバイオマス事業、香川県豊島で「mamma」を運営しながら、再エネ、地方創生、人材育成などの分野で企画やコンサルティングを行う。共著に「エネルギーの世界を変える。22人の仕事(学芸出版社)」「持続可能な生き方をデザインしよう(明石書店)」などがある。

【19】（発酵と微生物）発酵という技法 ～微生物が教えてくれる共生の哲学～

選択必修



講師：渡邊格

**タルマーリー オーナーシェフ**

1971年東京都東大和市出身。23歳で学者の父とハンガリーに滞在。食と農に興味を持ち、25歳で千葉大学園芸学部に入學。「有機農業と地域通貨」をテーマに卒論を書く。

新卒で農産物流通会社に就職するも、31歳でパン職人の道へ。渡邊格ならではのパンづくりを追求し、麹菌採取の道で目覚める。著書に『田舎のパン屋が見つけた「腐る」経済』（講談社）。同書翻訳本が韓国でベストセラーに。台湾、中国でも翻訳され、国内外で講演活動も行っている。

日時：9月8日（日）

場所：鳥取県智頭町

講義内容：

発酵食品が身体に良いとは知っていても、発酵の仕組み自体を詳しく知っている人は多くありません。「発酵」とは、酵母や細菌などの微生物がエネルギーを得るために有機化合物を分解して、アルコール類・有機酸類・二酸化炭素などを生成していく過程を言います。実は私たちは、生活のあらゆる場面で発酵という技術を使っています。発酵食品や藍染、漆喰、現代社会では発電なども発酵の力で行われます。つまり、私たちは日常的に微生物の力を借りて生きているのです。

その微生物たちは、とても絶妙な共生の原理で共存しています。それぞれが力を出し合うことによって、人間が使うのに丁度よい現象が起きたり、大自然の循環が起きたりしています。

本講義では、何となく知っている「発酵」をもう少し理解し、身近なところから使えるようになること、そして発酵という現象の中で微生物が教えてくれる、人間社会にも通じるルールや哲学を考えることが狙いです。

【20】（教育）オルタナティブ教育 ～森の中で、子どもの力を信じ、見守る保育～

選択



講師：西村早栄子

**NPO法人智頭町森のようちえんまるたんぼう 代表**

1972年東京生まれ。1994年東京農業大学林学科卒。1996年琉球大学大学院修士課程終了。1999年京都大学大学院博士課程課程終了。大学在学中にマングローブの研究に興味を持ち、大学院生時代に1年半ミャンマーへの留学経験あり。2003年夫の出身地である鳥取県入庁。2012年退職。06年仕事で出会った智頭町に惚れ込み一家で移住。09年仲間達と「智頭町森のようちえんまるたんぼう」を立ち上げる。NPO法人智頭町森のようちえんまるたんぼう代表。中学生を筆頭に3児の母。

日時：6月8日（土）

場所：鳥取県智頭町

講義内容：

グローバル化や技術革新によって世の中が急激に変わる中で、世界的に見ると、教育の在り方も大きく変わろうとしています。そんな、オルタナティブ教育の中で一つの選択肢となっているのが、デンマーク発祥の「森のようちえん」です。特徴は、365日自然のなかで過ごすということ、また、保育者が「見守る保育」という子供たちを信じて子どもたちに任せる在り方を取っていること、です。

本講義では、智頭町の森のようちえんまるたんぼうにて子どもたちや保育者の様子を見学し、また世界や日本で始まっているオルタナティブ教育を知ること、次世代の育ちに良い環境を考え、これからの日本目指す教育の在り方を議論します。

【21】（ものづくり）伝統工芸 ～時代の変化へ対応した伝統技術～

選択



日時：10月3（木）-5日（土）

場所：新潟県三条市・燕市

ジャンル：民藝

講義内容：

全国各地に、伝統工芸があります。今のように科学技術のなかった時代から、熟練した職人の手によって、生活を支える道具が作られてきました。しかし、大量生産品が普及し、ホワイトカラーの仕事優勢になっている中で、後継者不足や売上低迷などの問題があります。そんな中、伝統工芸の分野でも、新しい時代を切り開こうと趣向を凝らし、ニーズに合わせた形で商品開発したり、観光との掛け合わせや工場を解放することによって魅力を広めようとする動きがあります。

本講義では、伝統工芸が今も息づく町として知られる、燕市・三条市で開催される「KOUBAの祭典」に参加し、伝統工芸品に触れ、熟練の技や工場の空気などを五感で感じ楽しみ、伝統工芸の本質と時代に合わせて変容していく部分の面白さ、「伝統とは何か？」について考えます。

【22】（アート/デザイン）アートが人を呼び、人が人を呼び ～西会津国際芸術村の取り組み～

選択



日時：10月6日（日）

場所：福島県西会津町

講義内容：

過疎地で注目されているのが、外部の若者やクリエイティブな人材を誘致することで、人口構造や人口構成を変化させる取り組みです。農林業だけに頼らないバランスの取れた持続可能な地域づくりをする狙いがあります。

本講義では、西会津国際芸術村を中心とし、ランドスケープデザインを基にした地域デザインや、アートで人を呼ぶ活動をされている矢部さんから、人口減少を止めるのではなく、たとえ少なくなったとしても身の丈に応じた、しかも知的・文化的に活気がある町づくりの取り組みを実際に現地に足を運び学びます。「山あいの静かな集落到たたずむ芸術村では、自然と人間の付き合い方を見つめ直しながら、古来培われてきた伝統的な里山の暮らしの知恵を再評価し、古くて新しい価値観による文化的なライフスタイルを探索しています。そして、地域の持続可能性を模索するため、“芸術”を広く人間の暮らしを支える“技”や“知恵”としてとらえ、地域が失いつつある歴史・風土・民俗・文化・伝統技術をデザインやアートの持つ創造の力と融合し、発信していきたいと考えています。」

講師：矢部佳宏



**西会津国際芸術村ディレクター
一般社団法人BOOT 代表理事**

1978年生まれ。マニトバ大学大学院ランドスケープアーキテクチャー修士（カナダ）首席修了。長岡造形大学で持続可能な集落風景について研究した後、（株）上山良子ランドスケープデザイン研究所で修行。その後、studio CLYNE（カナダ）、NITA DESIGN GROUP（上海）等で庭や緑地、都市ランドスケープデザインなどに携わるが、震災を機に自らが19代目となる西会津町奥川の榎山集落にルーターン。西会津国際芸術村を拠点に、クリエイティブ人材や地域の文化DNAを資本とし、アートプロジェクトや空き家再生拠点ネットワークによる新たな町の骨格づくり、古民家宿を拠点とした集落再生など、町全体の持続可能なランドスケープ再構築にも取り組んでいる。

【23】（思想・哲学②）農山漁村の民衆精神② ～「里」の思想と信仰心～

選択必修



日時：10月20日（日）

場所：都内

講義内容：

近代的世界は「ローカルであること」を解体しながら普遍的な世界をつくりだしました。人や地域が積み重ねてきた時間というものが変化や進歩と結びついた概念になり、いつの時代においても価値を持続ける普遍性が否定されます。

近代的な個人という理念は、自然や歴史、地域や協同といった関係のなかで生きる人間の世界をこわし、人間を普遍的な個に変え、人間を交換可能な個人にしました。しかし、一代ではつくりだせないものに支えられて、人はある一時代を生きています。いまこそ自分が存在する「里」を持ち、その「里」というローカルな世界からすべてを組み立てなおす必要があります。その舞台となる農村共同体とは何か？ 共同体を形成する根底に息づく精神性とは何か？ 森羅万象、自然と共生してきた信仰心について考え、議論します。

講師：内山節



哲学者

立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授（2015年定年にて退任）

特定非営利活動法人森づくりフォーラム代表理事

1950年、東京生まれ。1970年代から東京と群馬県上野村の二地域を往復する生活を営み、自ら畑を耕し、里山に囲まれた農村の暮らしを通して、自然と労働の思想を問い続ける実践的な哲学者として知られている。

自然論・労働論・共同体論などを専門とし、立教大学大学院教授、東京大学講師などを歴任。東北農家の会、九州農家の会などでも講師を務める。主な著書に「ローカリズム原論」「文明の災禍」「共同体基礎理論」「清浄なる精神」「里という思想」「自然と労働」「日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか」などがある。

【24】（農業①）自然栽培と固定種・在来種 ～命を繋ぐ根源的活動とは～

選択



日時：11月2日（土）

場所：岐阜県郡上市

講義内容：

農業は、人間の命を繋ぐ根源的な活動です。しかし、現在市場で主に流通している形の揃った安価な野菜などの大半は農薬・化学肥料・交配種（F1）を使った農法によりを大量に作られたもので、これらは毎年、資材や種を新たに買い足し与えなければ、成り立たない農法でもあります。本来あるべき微生物の力や自然界の循環の輪、野菜の個性がそこにはありません。

本講義では講師の岡本さんが実践している「無肥料栽培」について伺います。農薬や化学肥料は一切使用せず、雑草や米ぬか、落ち葉などを肥料とし極力その土地に在るものを使います。また、固定種・在来種の種を、種取をして次年度に繋ぎます。水や土壌、空気や虫まで、本来有るべき循環の輪を取り戻し、より環境と植物に寄り添った農業が可能となります。

また、農業の色々なやり方、最新の情報を精査し、地域での農業の在り方を議論します。

講師：岡本よりたか



無肥料栽培家・環境活動家

空水ビオファーム 代表

株式会社岡本商店 代表取締役

たねのがっこう 主宰

1958年福井県生まれ。TVディレクター時代、取材を通して、農薬、除草剤、肥料が環境にもたらす破壊的ダメージを知り、また、ITエンジニア時代に体調を壊し、40歳半ばで、山梨県北杜市にて、無農薬、無肥料、無除草剤、自家採種の小麦や野菜の栽培を始める。

無肥料栽培の普及、遺伝子組み換え種子の危険性の啓蒙ために、全国各地にて年間150回ほど、無肥料栽培セミナーや講演を開催。また、シティファーマー構想を立ち上げ、家庭菜園ワークショップも積極的に展開している。

現在は、岐阜県郡上市にて、農業スクール及びシードバンク「たねのがっこう」を運営。

【25】（狩猟）狩猟とジビエ ～人と獣の共生関係～

選択



講師：興膳健太

**猪鹿庁 長官****NPO法人メタセコイアの森の仲間たち 代表理事**

1982年福岡県生まれ。2009年からNPO法人メタセコイアの森の仲間たちで狩猟免許を3名取得し、猟師の6次産業化に取り組む。現在、岐阜県郡上市において、守り、捕獲できる集落倍增計画を広め、市内の多くの集落で獣害を獣益に変える支援を行っている。平成25年に農水省の鳥獣被害対策優良活動表彰生産局長賞を受賞。現在は、狩猟サミットや日本猪祭りなど狩猟の魅力を広く伝えていく活動も行っている。

日時：11月4日（月・祝）

場所：岐阜県郡上市

講義内容：

近年中山間地域を中心に鳥獣被害が深刻な状況にあります。生鳥獣による農作物への被害額はおよそ200億円で、その6割が獣類、4割が鳥類によるものであり、獣類では9割がイノシシ、シカ、サルによるものとされています。主な原因は餌となる広葉樹が少なく針葉樹が増えたこと、集落の過疎化・高齢化による人間活動の減少などとされています。しかしながら、これらは人間目線での話です。動物はずっと山の中に住み、動物と人間は自然界において共生してきたはずで、生態系はどう変わった、または変わっていないのでしょうか。そして、動物と人間はどのように共生できるのでしょうか。

本講義で参考にするのは、岐阜県郡上市で活動する猪鹿庁です。狩猟の現状と課題、里山で暮らしていくための活動、ジビエの6次産業化について学び、人間と自然界の良い関係性について考えます。

【26】（子育て）コミュニティベースド育児 ～映画「いのちのはじまり」から～

選択必修



日時：11月17日（日）

場所：北海道浦河町

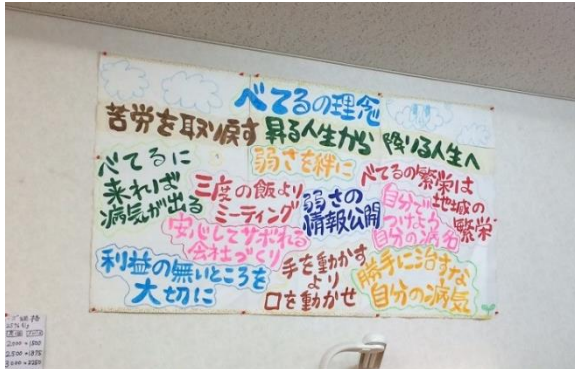
講義内容：

社会を構成しているのは人です。ということは、究極的には、育児とは社会を創ることであり、とても重要なことであると私たちは考えています。ただ、育児は金銭面、体力面、精神面、あらゆる面において大変で、二人または一人の親だけでできることではありません。本講義では、世界各地のさまざまな形の育児を取り上げたドキュメンタリー映画「いのちのはじまり」を鑑賞し、地域全体で子どもを育てていくか、考え議論します。

【27】(多様性社会) 多様性の活かし合い ～弱さから始まる仕事と社会～

選択必修

日時：11月18日(月)
場所：北海道浦河町



講義内容：

一億総活躍社会、社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン）（※）がキーワードになっています。それはどういう仕組みで叶えられるのでしょうか。浦河べてるの家は、精神障害をかかえた人たちの有限会社・社会福祉法人です。その特徴は、病気を治療し、社会復帰をめざすのではなく、悩み、弱さをそのまま受け入れ、問題だらけの人生を肯定する力の獲得をめざしていることです。日高昆布の通販からはじまり、農産物・海産物の事業も行っています。「べてるの家」は生活共同体、働く場としての共同体、ケアの共同体という3つの性格を有しており、100名以上の当事者が地域で暮らしています。本講義では、当事者ミーティングを見学し、当事者の作業のお手伝いをさせて頂く中で、きれいなことではない社会的包摂の現場とその知見を学びましょう。

※社会的包摂とは、1980年代、雇用や地域的つながりから脱落する「社会的排除」（失業、技術および所得の低さ、粗末な住宅、犯罪率の高さ、健康状態の悪さおよび家庭崩壊などがもたらす生きる上での不利不便の壁）が先進諸国で新たな社会問題となった。対応する理念として「社会的包摂」が普及し、社会から孤立した人々がもう1度社会参加できるよう、制度や環境を整える取組が各国で展開された。誰もが潜在能力を発揮でき、出番をもってつながりあう社会をめざすもので、社会構造の変化や災害にも耐えうる社会の構築に繋がる。

【28】(住居) 住まいの再考 ～風土に根差した伝統的日本家屋の良さとは～

選択



日時：12月1日(日)
場所：神奈川県相模原市

講義内容：

伝統的な家屋には、半分外の部分（縁側や土間等）があり、家屋の外と緩やかに繋がっています。気候風土との関わり、自然との応答の中で培われた技術と知恵によって造られ、その土地でとれる材料、地域の資源や技術を使う「地産地消」が基本で、それが地域ごとに特色ある風景を生み出してきました。日本の伝統的な住まいづくりには、驚くべき技術と知恵が詰まっています。しかし、現代では、産業としての住まいづくりが先行し、廃棄物やシックハウス、海外の森林破壊などの問題が起きています。

そんな中、環境に負荷をかけない家、日本の森林を活かす家、日本の伝統技術を継承する家、セルフビルドによって手間をかける家、パッシブ技術や再生可能エネルギーなどを利用した自立する家、地域の信頼関係や地域経済への寄与などに配慮した家などが注目を集めています。また、現代人の生活の中で、「家には寝に帰る」ことが多くなっています。人が暮らし、その中で文化や関係を育む場所としての「住まい」を再興したいものです。

現代技術と日本の伝統家屋の良さを融合した家屋を自ら設計し、住まわれている講師の山田さん宅に伺い、議論します。

講師：山田貴宏



一級建築士事務所 ビオフォルム環境デザイン室 代表

1966年生まれ、千葉県佐倉市出身。早稲田大学建築学科都市環境工学専攻修了。清水建設株式会社、一級建築士事務所 長谷川敬アトリエに勤めたのち、2005年に一級建築士事務所 ビオフォルム環境デザイン室を設立。

主に国産材と自然素材を活用し、地産地消でかつ伝統的な木の家造りを中心とした建築/環境設計を行う。パーマカルチャーのデザイン手法・哲学を背景とした住環境づくりをめざす。建物とそれを取り巻く自然まで含めた幅広い環境と場づくりがテーマ。

【29】（サテライトオフィス）地域に溶け込むサテライトオフィス ～都会からの人材と地域を繋ぐ～

選択



講師：吉田基晴

**株式会社あわせ 代表取締役社長**

1971年徳島県海部郡美波町生まれ。複数のベンチャー企業勤務を経て2003年にサイファー・テック株式会社を東京都に設立。2012年人口7000人の過疎地、徳島県美波町にサテライトオフィス「美波Lab」を開設、2013年に本社を美波町に移転。2013年6月、地方の暮らしの中で感じた地域課題をビジネスの力で解決したいという思いから、パブリックベンチャーの株式会社あわせを設立。同代表取締役。「日本の地方を元気にすること」を目指し、ベンチャー企業誘致や起業支援を軸とした地域振興事業に取り組む。その活動と美波町が賑わいを取り戻す様子が映画「波乗りオフィスへようこそ」となり、2019年春から劇場公開

日時：12月14日（土）

場所：徳島県美波町

講義内容：

徳島県の小さな漁村である美波町は日本一のサテライトオフィス出展企業数（17社）を誇ります。都心から企業社員やデザイナーが移住し、祭りなどにも積極的に参加し地域に溶け込み、家族を作り増やしています。企業社員が出張時に家族で訪れ、子供を美波町の小学校に通わせる「デュアルスクール」も実現。それらの仕掛けを成功させている地域活性化会社「あわせ」の代表である吉田基晴代表の話がうかがい、美波町の取り組みから都市企業と農山漁村の幸福なコラボレーションを学びます。

【30】（漁業）大敷網漁 ～近海の魚を地域で頂く～

選択



日時：12月15-16日（日・月）

場所：徳島県海陽町

講義内容：

漁業の問題点の一つとして、資源管理の難しさが挙げられます。世界全体が経済成長し人口が増えることで漁獲量が増え、資源量が減っているといわれています。それに対し、日本国内でも養殖や資源管理の適正化などが行われています。一方で、近海で獲れた魚介類をその地域で頂き、未利用魚を活用する在り方も一つの自然な在り方と言えます。

本講義では、伝統的に行われてきた大型の定置網を使って魚を狙う「大敷網漁」を体験します。船の上で体験する漁は圧巻です。また、そのまま船の上で文字通りの猟師飯、獲れたばかりの魚を頂きます。

豊かな海の恵みを頂く猟師の仕事を体験するとともに、持続可能な漁業の在り方について考えます。

【31】(ゴミ・リサイクル) ゼロウェイスト ～資源循環の輪を繋ぐ～

選択



日時：12月16日（月）

場所：徳島県上勝町

講義内容：

循環型社会を考えるとポイントになるのは、廃棄物の処理・再資源化です。人間が活動すればするほど増えるのは、廃棄物と糞尿だからです。焼却・埋め立て・何でもリサイクル・科学的処理がもたらしたのは、資源の無駄遣いと有害物質による健康被害と水質汚染など環境への悪影響です。

本講義では、ゼロ・ウェイスト問う考え方を学びます。ゼロ・ウェイストとは、無駄・ごみ・浪費をなくすという意味。出てきた廃棄物をどう処理するかではなく、そもそもごみを生み出さないようにしようという考え方で、社会の仕組みを変えていこうとするものです。

講義を通じて、資源循環の在り方を学び、議論します。

【32】(林業) 自伐型林業 ～環境保全と経済性の両立～

選択

日時：1月11日（土）

場所：高知県佐川町



講義内容：

日本の国土の7割を森林が占めています。「地域創生」に取り組むならば、林業の再興、国産材の有効利用にこそ力を入れるべきです。「大規模・大量生産・集約・高投資・高コスト・委託/請負」型の林業が国策「森林・林業再生プラン」とされている一方で、土佐の森・救援隊は「小規模・少量多品目生産・分散・低投資・低コスト・自立」型の自伐林業を核とした『土佐の森方式』を確立し、地域に根ざした仕組みを展開しています。

大規模林業一辺倒では森林破壊や市場破壊が多発していますが、地域に根ざした自伐型林業『土佐の森方式』は、木質バイオマス利用のための林地残材収集や、地域林業再生、地域雇用、地域経済活性化、森林環境再生に大きく貢献し、林業市場を大きく拡大することも分かってきました。自伐型林業は森林再生や地域振興に大きく貢献します。この情報が全国に伝播し、導入地域はすでに40地域を越えようとし、さらに勢いを増しています。

牽引役の中嶋健造さんから日本の林業の問題点、自伐型林業の概要について学び、自伐型林業を実践している方の施業山林も見学します。

講師：中嶋健造

**NPO法人自伐型林業推進協議会 代表理事**

愛媛大学大学院農学研究科修了。NPO法人土佐の森・救援隊理事長。

1962年生まれ。著書に「バイオマス収入から始める副業的自伐林業」全国林業改良普及協会。その他、農山漁村文化協会、全国林業改良普及協会、大日本山林会等の雑誌執筆多数。鳥取大学地域学部非常勤講師（平成21年度～）、内子町小田深山保全・活用検討委員会委員（平成19年度～）、中国四国バイオマス発見活用協議会委員（平成21年度～、農林水産省中国四国農政局）総務省・地域の元気創造本部有識者会議委員（平成24年度～）、総務省・地域力創造アドバイザー（平成26年度～）IT、経営コンサルタント、自然環境コンサルタント会社を経てフリーに。平成15年、NPO法人土佐の森・救援隊設立に参画し、現在理事長。山の現場で自伐林業に驚き興味を持ち、地域に根ざした環境共生型林業が自伐林業であることを確信し、「自伐型林業＋シンプルなバイオマス利用＋地域通貨」を組み合わせた「土佐の森方式」を確立させ、真の森林・林業再生、中山間地域再生、地域への人口還流等のために、自伐型林業及び土佐の森方式の全国普及にまい進している。

【33】（木材加工）製材と木材加工 ～レーザーカッターによる高付加価値化～

選択



日時：1月12日（日）

場所：高知県本山町

講義内容：

高知県本山町が誇る、木材加工ベンチャー企業のばうむ社。大手ブランドからも受注が相次いでおり、東急ハンズでもその商品が取り扱われています。なかでもレーザーカッターを活用した木材製品の評判が高く、その付加価値は、原木価格の150倍にまで上ります。しかしながら、高知県嶺北地域は豊富な森林資源に恵まれているにもかかわらず、木材価格の低迷によって十分な森林整備が行われていない現状があります。ばうむ社では、木材の利用を促進し、木材価格の向上を図ることで自社も、地域も、自然環境も守られる商売の確立を目指しているのです。本講座では、ばうむ社を訪問し、工場見学と木材加工業のポイントについて、代表の藤川さんにお話を伺います。

講師：藤川豊文



ばうむ合同会社 代表

（有）藤川工務店 代表取締役

1964年、高知県本山町出身、高知工業高校卒業後、神奈川県横浜市の建設会社勤務。1966年、Uターン、家業の（有）藤川工務店入社、現在、代表取締役。

Uターン後、衰退した地元の経済を活性化したいという思いが強くなり、2004年に商工会青年部の先輩、後輩11名に声をかけて11万円の活動費を集め、地域の資源を活かして、製造・販売を行う「木部会ばうむ」を結成、第一弾として、地域の木材を使用した、学童机・椅子の製造・販売開始、2010年にばうむ合同会社法人化、代表となる。

現在は、木製雑貨「もくレース・木紋柄」のブランドを立ち上げ、北海道から沖縄まで全国で販売、又、地元ブランド米を活用した、焼酎の製造販売も行い、年商5,000万円、10名の雇用生み、持続可能な、地域の総合商社を目指し、実践中！

参考書籍：まだ林業で消耗してるの？：「ばうむ」代表・藤川豊文さんから、自然を守る林業を学ぶ。（イケハヤ書房）

【34】（商業）地域商社 ～地域密着型のものづくり&プロデュース～

選択



日時：1月13日（祝・月）

場所：高知県四万十市

講義内容：

地域の自立のためには、地域資源を有効活用して、外貨を獲得する必要があります。そのような意味で、地元の特産品を使った商品開発や六次産業化が有効な手立てではありますが、まだまだ地域資源を生かし地域にお金循環する仕組みが作れていないのが現状です。また、都市へ地域資源を流すことで従属的な関係になったり資源枯渇に陥ったりするのではなく、地域資源の保全と再生産が適切に行われ、地域が豊かになる在り方を作る必要があります。

そこで、今注目を集めているのが、地域をまるごとプロデュースして地域外からのお金の流れを作る「地域商社」です。本講義は、地域商社の中でも、地域に密着し、地域が豊かになる活動をしている「四万十ドラマ」さんから取り組みを学び、地域資源の活かし方について考えます。

講師：畦地履正



株式会社四万十ドラマ 代表取締役

昭和39年、旧十和村（現：高知県高岡郡四万十町）生まれ。農協職員などを経て、平成6年に四万十川中流域町村（大正町・十和村・西土佐村）が出資した第三セクター・株式会社四万十ドラマ（平成17年から完全民営化）に就職。平成19年、道の駅「四万十とおわ」の運営を四万十町より指定管理を受け（平成30年3月までにて指定管理業務終了）、同年10月に株式会社四万十ドラマの代表取締役に就任。現在は、総務省・地域力創造アドバイザー、農水省・6次化産業ボランティアプランナーなどを務めながら、「四万十川に負担をかけないものづくり」をコンセプトに地域と密着し、自然循環型企業を目指した事業展開を行っている。